

言葉のカーアイゼンハワー大統領の訪ソ演説計画―

西川 秀和

はじめに

1. 訪ソ計画の背景
2. レニングラードでの演説
3. キエフでの演説
4. モスクワでの演説
5. 結語

はじめに

本稿の目的は、アイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower)大統領が、1960年6月に予定していたソ連訪問でどのような演説草稿を準備し、ソ連首脳部並びにソ連国民に何を訴えかけようとしていたのかを明らかにすることである。アイゼンハワーの訪ソについてその詳細を記した研究はほとんどない。それは訪ソが結局実現しなかったことによる。だが、もし実現していれば、アイゼンハワーの訪ソは第二次世界大戦後の米ソ関係を彩る一つの歴史的瞬間として記憶に止められたことは疑いない。それ故、アイゼンハワーが訪ソにおいてどのようなレトリック戦略を練っていたのかを探ることは、冷戦レトリック研究⁽¹⁾において、ささやかながら一つの貢献となるはずである。

また当研究の一般的な意義は、言葉が社会の中でいかに政治的に利用されるのかを示唆することにある。なぜなら政治という場で言葉を駆使することでできるだけ多くのシンパを得ようとする営為は多くの社会、または民族で観察されることだと考えられるからである。

1. 訪ソ計画の背景

1960年は米ソ関係好転の期待が高まった年であったが、それを最も如実に示していたのが1960年6月、フルシチョフ(Nikita Sergeyeovich Khrushchev)の訪米に応える形でのアイゼンハワーの訪ソ計画であった。その計画は、モスクワ、レニングラード(現サンクトペテルブルグ)、キエフ、イルクーツクといったソ連国内の主要四都市を周遊し、その途上で大小二十三のスピーチや声明を発表するというものであった[Leuchtenburg 1990a]。一連のスピーチの中でも、レニングラード、キエフ、モスクワの三都市において、ラジオ放送される予定だった三つの演説は特に重要なものである。6月13日にレニングラード、翌14日にキエフ、そして6月16日、フルシチョフとの会談後

にモスクワでそれぞれ演説が行なわれる予定であった [Leuchtenburg 1990b]。

しかし、アイゼンハワーの訪ソ計画は、1960年5月16日、パリ首脳会談の席上でフルシチョフが一方的にアイゼンハワーの訪ソ中止を通告したために破棄されることになった。フルシチョフは首脳会談の開会声明で U-2 事件⁽²⁾をもとにアメリカを非難したが、その非難と同じような口調、そして同じくらいの時間を割いてアイゼンハワーの訪ソ計画をキャンセルする必要性について論じた。アイゼンハワーはパリ首脳会談開催の前日、ド・ゴール (Charles De Gaulle) 仏大統領と、首脳会談席上では U-2 事件についてできるだけ触れずに済むようにする作戦を練っていた。しかし、フルシチョフが自らの開会声明を出す機会を与えるように強く迫ったので、その作戦は功を奏しなかったのである。

アイゼンハワー政権内では、ソ連が U-2 事件よりもアイゼンハワーの訪ソのほうを気にかけていて、だからこそ U-2 事件を逃げ口上に使ったのだと考える者もいた [Leuchtenburg 1986a]。ソ連によるアイゼンハワーの訪ソ取り消しに関してアレン・ダレス (Allen Dulles) 情報局長官は国家安全保障会議の席上で自らの分析を示している。アレン・ダレスは次のように分析している。

フルシチョフは、西側とのデタントを恐れるソ連の指導層からの圧力を受けていた。パリ首脳会談で、フルシチョフが U-2 事件を扱ったやり方は、ソ連の国内政治に大きく影響を受けている。ソ連国民は、彼らの繁栄が西側とのデタントとうまく折り合えると信じるようになっていた。フルシチョフはクレムリン内部で深刻な問題を抱えていて、ソ連指導層内部で U-2 事件の処理をめぐる議論が起こった。ソ連指導層は、5月の初めには既に、U-2 事件を利用し、アイゼンハワーの訪ソを取り消そうと決めていた。ソ連が早くから大統領の訪ソを取り消そうとしていたのは、あるソ連の雑誌が、大統領の訪ソを歓迎する記事を載せようとしたところ、急遽5月6日に印刷機を停止し差し替えの記事を載せるようにしたことからも分かる [Eisenhower Library 1960]。つまりダレスによれば、ソ連指導層はアイゼンハワーの訪ソを歓迎するつもりはなく、たまたま起こった U-2 事件を訪ソ取り消しの口実にうまく利用したということになる。

この分析に対してハーター国務長官 (Christian A. Herter) は、とにかく、ソ連が早くも5月6日に大統領の訪ソを取り消そうと決定していたのは明らかであると述べ、アイゼンハワーも概ねこの分析の妥当性を認めている。

U-2 事件でアイゼンハワーは、ソ連の秘密主義により偵察飛行をせざるをえなくなったという、アメリカへの国際的非難を避けるためソ連に罪を被せようとするレトリックを構築しているが、本心では東西緊張緩和を望んでいた。なぜなら冷戦の長期化は軍事費の絶え間ない増加をまねき、その結果、国民経済を破綻させることになるアイゼンハワーは懸念していたからである。それでも U-2 事件でソ連を非難するレトリックを構築したのは、ソ連が展開していた平和プロパガンダに対抗し、アメリカの正当性を保持するためであ

った。つまり、アメリカの正当性を失うことなく雪解けを促進することがアイゼンハワーの最重要課題であった。

だが当時のアメリカ国民は、「雪解けが起こり始めていること」にあまり気が付いていなかった。それは、アメリカ国民がアイゼンハワーに寄せた手紙からもうかがえる。以下は 1960 年 3 月 27 日付で十三歳の少女からアイゼンハワーに送られた手紙の一部である。

「第一の質問は、最も論議的になる質問ですが、ロシアと我々の強弱関係です。毎日毎日、我々はロシアより優っているのか劣っているのかと誰かが話題にしているのを御存知でしょう。もしあなたが何らかの理由でお答えになれないのなら、次の質問に答えて下さい。この質問は、私にとって最も大事な質問です。あなたは、いつか第三次世界大戦が起こるとお思いでしょうか。もしそうなら、どんな状況で起こるのでしょうか。あなたに質問をしたのだから、私の考えをあなたに披露しなければフェアじゃないと思います。もし戦争になったら、その相手はソ連だと私は思います。個人的には私はフルシチョフさんが嫌いではなく、素敵な人だと思います」 [Leuchtenburg 1986b]

フルシチョフ個人の好感度は訪米を期にアメリカ国民の間で高まったようである。だが、東西対立が根本的に解消されたと考える者は少なかった。そのことは、当時の国民がホワイトハウスに寄せた多くの手紙を見れば分かる。それだけにアイゼンハワーの訪ソは、「雪解け」をアピールする絶好の機会になりえるものであった。この少女からの手紙に対して、アイゼンハワーは 1960 年 4 月 13 日付で返書を送った。

「確かに、ソ連が最近、例えば、宇宙用エンジンに関して我々より優れたものを持っているというのは明らかです。しかし、我々が他の分野において科学的優位を示しているということも明らかなのです。軍事力に関する基本的な問題について、私は君に、我々の軍事力が適切なものであるだけでなく、ソ連に敬意を払わせるほどのものであると請合うことができます。もう一度世界大戦が起こるかどうかが君は質問していましたね。私は、私が何度も何度も言っていることを繰り返すより他ありません。多くの国々が所有する恐ろしい兵器を使っての地球規模の戦争は、私達みんなが知っているように、地球の大部分を絶滅させてしまうでしょう。私は、フルシチョフ氏が、私や他の諸国の指導者と同じく、無思慮な破滅を避けることを切望していると思います。こうした状況下での私たちの最大の危機は、軍事的攻撃ではなく、自由世界全体を共産主義者の破壊活動と侵入にさらすことだと私は確信しています」 [Leuchtenburg 1986c]

この返書からは、共産主義の脅威を説きながらも、ソ連との対話を期待す

るアイゼンハワーの態度が見て取れる。アイゼンハワーは、訪ソ期間中に何をソ連首脳部並びにソ連国民に、そして世界に訴えようとしていたのか。少なくとも、アメリカ国民に対しては、先程も言った通り、「雪解けが起こり始めていること」を認識させる必要があったと考えられる。そして訪ソ中に計画されたスピーチは、その主たる対象をソ連国民にしているのは間違いない。以下では訪問順にしたがってレニングラード、キエフ、モスクワの順に、演説草稿を元にしてその内容を分析していく。

2. レニングラードでの演説

レニングラードは、フィンランド湾頭に位置するモスクワに次ぐ大都市で、古くは「西欧に向いた窓」と呼ばれた都市である。レニングラードが果たしてきた歴史的役割からすれば、東西緊張緩和について口火を切るのにはまさにうってつけの場所だと言える。アイゼンハワーは、次のような言葉でレニングラードでの演説を始めることになっていた。

「1945年にロシアを訪問した際、私の滞在は非常に短いものとならざるをえなかった。それでもナチスの横暴からレニングラードを守りきった勇敢な人々に敬意を払わないうちは、ベルリンでの私の職務に戻るなどできなかったと強調しておきたい」 [Leuchtenburg 1990c]

ここで述べられているように、アイゼンハワーは、スターリンから1945年6月24日の凱旋パレードに直々に招待されるほど、ソ連で歓待されたことがあった [Leuchtenburg 1989]。アイゼンハワーが1945年という米ソ関係が最も良好な時にソ連を訪問していたことは緊張緩和への大きな政治的資産となりうるものであった。アイゼンハワーは、第二次世界大戦におけるレニングラードの勇戦を称揚し、さらに米ソが共に勝利を祝ったことを強調する。続けてアイゼンハワーは戦後の米ソ関係について述べている。

「無益な言い争いよりももっと悪いものが蔓延している。脅威を唱える激しい言葉が声高に叫ばれることで、疑惑、憎悪、そして恐怖が、かつて共通の目的と勝利で固く結び付いていた人々の関係を表示するものとなった。我々は皆、友誼に対して悲劇的な罪を負っている。もし我々が肩をすくめて『そんなことはいつも起きることさ』と言って、あなたがたと私、皆が、疑惑、憎悪、そして恐怖を払拭するために積極的に、かつ活発に行動しなければ、我々の過ちはすべての罪の中で最も悲劇的なものとなるだろう」 [Leuchtenburg 1990c]

ここでは、第二次世界大戦中、アメリカとソ連は協力関係を築いていたが、疑惑、憎悪、そして恐怖といった感情がお互いに芽生えたため、緊張が高ま

ったというように戦後の米ソ関係をまとめている。これは、冷戦はいったい誰のせいなのかという責任の所在を曖昧にする効果を持つレトリックである。疑惑、憎悪、そして恐怖に囚われることで、友誼を失ってしまった我々全員に責任があると述べることで冷戦の根本原因を曖昧にし、責めをアメリカにもソ連にも具体的に帰することをしないという巧妙なレトリックである。先にトルーマン(Harry S. Truman)大統領も、トルーマン・ドクトリン発表以前に「懐疑主義」という言葉を使って同様のレトリックを用いている。

「今日、勝利のために勇敢にそして長い間共に戦ってきた国家間で存在する本質の相違は、希望がないものでも和解できないものでもない。勝利者たる国家の中には、解決できない程深刻な利害衝突はない。(中略)。我々にとって喫緊で重大な脅威は、国際協調の有効性に対する信念を喪失させるような幻滅と知らぬ間にはびこる懐疑主義の脅威である」[General Services Administration 1961: 436]

トルーマンとアイゼンハワーが違っている点は、アイゼンハワーがさらに一步を進めて、疑惑、憎悪、そして恐怖を取り除くために「積極的に、かつ活発に行動」することを呼びかけたことである。こうした違いは、トルーマンが、主にアメリカ国民に訴えかけていたのに対し、アイゼンハワーはソ連国民に訴えかけていたという点によるものだと考えられる。アイゼンハワーは非常に巧みな比喻を用いて言葉を継ぐ。

「私が少年の頃、馬は案山子や物陰、兎などに驚かないように目隠し皮を付けていたものだ。でも今では我々人間が、恐ろしい光景を見ないようにするためにではなく、人間の存在に関わる中核的な現実を無視するために意識的に自らに目隠し皮を付けている。人間というのはしばしば世界中の人類の運命、共通の目的、共通の抱負に対して目をつぶることが多過ぎる。我々は皆、隣人のことをほとんど知らずに生きている。つまり、目隠し皮を取った時、[何も知らないままでいた]我々はプロパガンダによって捻じ曲げられた色眼鏡で隣人を見ることになってしまう。平和への唯一の道はお互いに開かれた社会にあると確信するまで、我々は永遠に恐怖と疑惑に囚われ続けるだろう。最終的に、あるがままの隣人の姿を知ること、我々は、馬が兎を恐れるように隣人を恐れる必要はないと悟るようになる」[Leuchtenburg 1990c]

人間が馬のように目隠し皮を付けるという滑稽な情景が思い浮かぶ、ユーモアを交えた比喻であるが、同時にその愚かさを十分に説いたものであると言える。隣人を恐れて目を覆うことは、人間が馬のように目隠し皮を付けることと同じく愚かなことである。アイゼンハワーはそれをソ連国民に気付かせようとし、次いでアメリカが「開かれた社会」であり、もしソ連国民がア

アメリカを旅行することがあれば、「アメリカのすべて」を見ることができると強調する。演説の中盤で、アイゼンハワーは「平和」と「自由」についてソ連国民に情熱的に語りかける。

「もう一つの〔疑心暗鬼を取り除くという〕使命と並んで私をかりたてる第一の使命は、この世界で、日々の生活の中で、他の何よりもアメリカ国民はすべての国々との平和を、相互理解に基づく強固な平和を、友誼をともなった温かい平和を、自由の下享受される平和を、戦争と脅威からの自由を、プロパガンダと憎しみからの自由を、国々がお互いに無関心になり、疑いを抱き、恐れを抱くようにさせる、人間が作り出したあらゆる種類のカーテンや壁からの自由を希求していることをあなたがたに会心させ、納得させ、分かってもらふことである」[Leuchtenburg 1990c]

たった一つのフレーズの中に、「平和」と「自由」が、リズムよく配置され、合わせて六回も使われている。この箇所は演説の中でアクセントにあたる部分である。こうした様々な形の「平和」や「自由」を列挙する方式は、フランクリン・ローズヴェルト(Franklin D. Roosevelt)の「四つの自由」演説でも見られた方式である。ただこのフレーズは、見方を変えればアメリカの一方的な押し売りにうつる可能性がある。そこでアイゼンハワーは、十九世紀末にボルコンスキー(Sergiei Mikhailovich Volkonskii)がシカゴで行なった演説の一節を引用している。

「あなたがたが、国家とは何か、国家ができることは何かを知りたいと思った時、国家の理念、抱負、そして性質を知りたいと思った時、国家の魂を知りたいと思った時、その国家について、一回きりでせいぜい一ヶ月か二ヶ月しか残らない安価なパンフレットや新聞記事から学んではならない。とにかく政治とは無関係に、その国家が人類の永遠の宝にどのような貢献をしたかということからその国家について学びなさい。すなわち、科学全般、芸術全般にどんな貢献をしたのかということから、その国の手本となるようなものから、そしてその国家が誇りにしている人物からその国家について学びなさい」[Leuchtenburg 1990c]

この引用を借りることで、ソ連政府を直接非難することなく、ソ連国民に政府や共産党によるプロパガンダを安易に信じないように説くことが可能になった。これまでのところ、ソ連政府を直接非難しているところはないのである。次にアイゼンハワーは、資本主義について語る。

「我々が自らの理想実現に向けて努力する最善の機会を我々に提供するシステム〔資本主義〕は、あなたがたに合わないかもしれない。決めるのはあなたがただ。あなたがたのシステムは、我々には合わない。我々は、あなた

がたのシステムと同様に、我々のシステムが、世界の他国民に対する唯一無二の救済策になるとは思っていない。彼らは、我々がやってきたように、他者の経験から望むものを取り入れながら自らの道を追求すべきである。我々が気に掛けるのは、それが、他者の介入によるものではなく、彼ら本来のやり方であり、彼らの選択と文化、そして成長の賜物であるべきだということである。我々は多様な発展が保障されるような世界のために努力している。我々は、お互いに優位に立とうと争って並び立つ陣営に世界を分けようとしているわけではない。我々は、多様な諸国民の関係を支配する国際法典を尊重するただ一つの世界共同体を望み、かつそのために努力している」 [Leuchtenburg 1990c]

ここでは、資本主義と共産主義の相対性を描き出している。資本主義も共産主義も互いに絶対的なものではないとし、そのどちらを選ぶのかは各国の国民の意思に委ねられているという。さらに注目すべき点は、共存よりもさらに進んだ多様性に基づく融和という概念を持ち出しているという点である。最後にアイゼンハワーは以下の言葉でスピーチをしめくくった。

「あなたがたが我々に対してもっと関心を抱くようになり、この『西欧に向いた窓』を通してアメリカをよく見るようになることを望みたい。ここと同じくアメリカでも、すべての国家間の公正なる永久平和は人類の偉大なる目標である。もし私〔の呼びかけ〕に応じてくれるのであれば、私は一生感謝するだろう」 [Leuchtenburg 1990c]

3. キエフでの演説

レニングラードの翌日、同時刻にキエフでのスピーチが予定されていた。キエフはドニエプル川中流に位置し、キエフ公国の首府として栄えた東スラヴ最古の都市の一つである。キエフでのスピーチも、レニングラードでの演説と同じく、第二次世界大戦に触れることから始められた。

「世界は十分に苦しんだ。そして我々は、地球上で戦争を再び引き起こしてはならないという確信を分かち合っている。先の大戦は悲惨なものであったが、さらに世界的な戦争が起きれば、あなたがたの街、我々の街、いずれも無事にはすまない。市民であろうと兵士であろうと、農夫であろうと工場労働者であろうと、共産主義者であろうと非共産主義者であろうと容赦はない。多くの人々にとって破壊、滅亡、そして混沌があるだけで全く利益にならない」 [Leuchtenburg 1990d]

アイゼンハワーは、第二次世界大戦を引き合いに出すことで第三次世界大戦がどんなに悲惨なものとなりうるのかソ連国民に悟らせようとしている。

先に紹介した少女の手紙からもわかるように、アメリカ国民にはもう十分にこうした認識が行き渡っていたが、ソ連国民に同様な認識が行き渡っていたかどうかは定かではなく、ソ連国民にとって記憶に新しい第二次世界大戦の惨禍を引き合いに出すことで、殊更に強調する必要があったと考えられる。さらに戦後の米ソ協調体制についてアイゼンハワーは、「疑惑と不信が、戦時の連帯で培った確固とした友誼を後退させた。両側に過ちがあり、機会を失うか、機会をとらえることができなかつたのだろう」と述べ、レニングラードでの演説から一歩進んで米ソ両国にそれぞれ過失があったことを認めた。それだけにとどまらず、アイゼンハワーは、ソ連のアメリカに対する不信感を払拭するべく努めた。

「ニクソン(Richard Nixon)副大統領は、ソ連の工場を訪問した際に、『あなたがたアメリカ人は平和を望んでいると言いながら、なぜ我々を基地と軍事ブロックで取り囲むのか』といった我々の政策に関する質問を浴びせられたと私に言った。この質問には正直な答えが必要だろう。また率直に、あるがままにあなたがたに語る必要がある。理解というものは、違いなど存在しないと装うことからは生まれぬ。(中略)。東欧の人々の自己決定権が否定されたと我々は考えている。さらに1950年に朝鮮で起きた事件により、多くの国々で恐怖が高まった。ハンガリーやチベットで起きた最近の事件により、そうした恐怖は消えるはずのないものとなった。我々が軍事ブロックに参加し、基地を所有していることを、あなたがたの報道は非難している。しかし、それは私が言及した事件の少し後のことである。1945年から1947年にかけて我々は1,050万人の兵士を削減し、陸海空合わせて150万人の兵士を残すのみであった。1949年までNATOはなかつたし、CENTOもSEATOも結成はその六年後のことである。我々は朝鮮戦争勃発まで軍隊を増やさなかつた。基地を、誰かを攻撃するために使ったり、または我々の政体を他国民に押し付けるために使ったりしなかつた。私は率直に話している。私はこうしたことを穏やかな口調で話す方法を知らない。すべての人が、こうしたことを我々が見るのと同じように見てくれはしないだろうということは分かっているが、私はあなたがたに、正直かつ率直に、我々の考えを伝えなければならない。現実はいくらでも変えられるべきものとして認識しなければならない」[Leuchtenburg 1990d]

「正直」、「率直」という言葉が強調されている。それは、カンザスの大地を連想させるような正直な人物であるというアイゼンハワーの評判を最大限に活用しているといえる。そうした評判は、「第二次世界大戦の英雄」という肩書きと並んでアイゼンハワーの大きな政治的資産の一つであった。アメリカの海外基地問題を特に取り上げた理由は、ソ連の「平和攻勢」プロパガンダが、海外基地の存在を世界の平和に対する脅威だと攻撃し続けていたからである。ここで注目される点は、アイゼンハワーが、共産主義の脅威に備え

るために「軍事ブロックに参加し、基地を所有している」とは明言せず、従って直接ソ連を非難するようなことはしていないという点である。また、「現実には変えられるべきものとして認識しなければならない」という言葉は、ソ連国民に対して米ソ関係改善を呼びかける力強い言葉である。次に示すように、かねてから懸案のベルリン問題に関しても直接ソ連を非難するようなことはしていない。

「私は、あなたがたの書記長が我が国にやって来たのと同じ理由で、つまり我々の関係を改善するためにあなたがたの国にやって来た。関係を改善するために、我々はやさしくて甘い事実だけでなく厳しくて苦い現実も知らなければならない。今日、両国はベルリンとドイツ統一問題に関して深刻に意見を異にしている。(中略)。アメリカ軍が協定に従って自発的にドイツの大部分から撤退したことにより、ソ連軍はドイツの大部分に入り込むことができた。ソ連側は全ドイツを一つの経済統一体として統治することに同意し、同盟諸国と共にベルリンを管理することを認め、ベルリンに西側が自由にアクセスすることを保証していた。しかし、時が経過するにつれて、ドイツ分割は我々とドイツ国民に多大なる困難を与えることになった。(中略)。単一民族が力により恣意的に分割されたままでは、異常で不自然で、そして危険でもありうると歴史は示している。ドイツの人々は戦時の経験から学んできている。世界における役割についてのドイツの見解は根本的に変化している。これは健全な発達である」[Leuchtenburg 1990d]

アメリカの立場をあまり表に出さず、統一ドイツが欧州の安全保障に貢献することを強調している。これは、第二次世界大戦でドイツ軍との戦闘で苦しんだソ連国民の統一ドイツに対する疑念を解消しようとする試みである。ベルリン問題ではこのようにアメリカの立場をあまり表に出さなかったものの、以下に見るように軍縮についてはアメリカの立場をはっきり示している。

「[ソ連が] 一方的に軍縮をしていると言ったすぐ後に、軍事力ではまだまだ優っていると言うことができるのは何故か理解に苦しむ。真偽が疑わしい軍事力の修正〔ソ連の軍事力の削減〕が平和を強固なものにすると語られても我々アメリカ人は当惑するだけである。我々にとってこれこそ『強硬』政策のように思える。我々自身、強硬政策を追求していると非難されているが、第二次世界大戦後の数年間を思い出して欲しい。我々は唯一の核保有国であったが、この独占を我々の理念やシステムを他国に押し付ける道具として使いはしなかった。1946年、我々は原子力エネルギーの完全なる国際管理を提案した。不運にも、米ソ両国はこの恐ろしい兵器の適切な管理に同意することはできなかった。そして不和という悲劇が、悲嘆に暮れる世界の目前でその後長い間演じられてきたのである」[Leuchtenburg 1990d]

アイゼンハワーは、ソ連による一連の「平和攻勢」プロパガンダの矛盾点を突いている。すなわちソ連は一方的軍縮を行なって兵員総数が減少しているはずなのに、それでいて猶、その軍事力がアメリカよりも優っていると言っているという矛盾である。アメリカは、1960年当時の米ソの軍事バランスを、アメリカの兵員総数が約180万に対し、ソ連の兵員総数が約210万程度であると見積もっていた。兵員総数ではソ連にアメリカが劣っているものの、国民総生産では、アメリカの約5000億ドルに対し、ソ連は約2000億ドルと、アメリカが圧倒的優位を保っていた[Kesaris and Gibson 1980]。アイゼンハワーは、ソ連がアメリカに対して非難するところの『強硬』政策を再定義し、『強硬』政策をとっているのはアメリカではなくソ連であるとその意味を巧みに逆転させている。これは相手の非難を封じ込めるレトリックとして非常に有効な手段である。最後にアイゼンハワーは、第二次世界大戦中の協調関係を再度引き合いに出し、新たなる協調関係の構築が必要であると説く。

「我々は帝政ロシアとイデオロギー面では異なっていたが、知っての通り、それは我々の歴史的な友誼の妨げとはならなかった。ごく最近では、第二次世界大戦中に、イデオロギーの違いにより、協調と同盟が妨げられることがあつたらうか。我々は、戦争の時にできていたことを平和な時にもできることを示さなければならない。共存よりもさらに一歩進もう。平和というのは、たとえ戦争に訴えないまでも、パートナーをうち負かそうとする状態ではない。我々は、平和をめぐって戦うべきではない。我々は共に平和を築くべきである。(中略)。我々は世界を違った目を通して見ているが、それは他方の見方が悪いものであるということではない。平和の最終目的は、戦いではなく、融和である。この地球上で、尊敬、友誼、そして融和の念を抱いて共に暮らしていく道を見つけ出そうではないか」[Leuchtenburg 1990d]

「我々は、平和をめぐって戦うべきではない。我々は共に平和を築くべきである」は蓋し名言であろう。「平和攻勢」プロパガンダを止めて、実質的な平和に向けて踏み出そうという呼びかけである。

この演説全般で注目すべき点は、アイゼンハワーが、ソ連政府首脳ではなく、主にソ連国民に対して呼びかけをしていたという点である。つまりソ連国民の意識変革により、ソ連政府首脳に東西緊張緩和に向けての実質的な歩み寄りを迫るという図式を見て取ることができる。こうした図式は、ウィルソン大統領が、全国的な遊説活動によりアメリカ国民の意識変革を促し、議会に国際連盟加盟の承認を迫った[リンク 1974: 170-174]という図式と共通するものが見られる。

4. モスクワでの演説

レニングラードでの演説とキエフでの演説に引き続き、アイゼンハワーの

訪ソ中最も重要な演説がモスクワでの演説であった。モスクワでの演説も先の両演説と同じく、第二次世界大戦について言及することから始めている。

「戦争で苦しむのは、政府でも、経済システムでも、イデオロギーでもない。苦しむのは人々であり、家族と一人一人の個人であり、大小問わず共同体である。そして家族から、村落から、街から、人間社会から暴力的にたとえ一人の人間の命であろうと奪うことは、そうした共同体の統一を損うことになる。我々一人一人も、もし生きていたなら周りの人々の人生を豊かにしたはずの兄弟の時ならぬ死を悲しまなければならないだろう」
[Leuchtenburg 1990e]

戦争で苦しむのは人々であるという一般的なテーマを提示することで、米ソ両国民の経験の共通性が語られている。もちろん実際は米ソ両国民の経験は共通のものではないが、こうした表現は、演説を聴くはずであったソ連国民一人一人の心情をとらえようとしたものであることは間違いない。

次いでアイゼンハワーは、アメリカ独立革命の経緯と、それに伴う産業科学革命と民主主義革命の二つの革命について説明を加えた。その産業科学革命の中で最も重要なのは核エネルギーの発見であることを述べ、さらに核兵器の問題について、「米ソ両国民は、すさまじい破壊兵器を持ち続けている。こうした兵器が戦争で使用されることはないと保証しなければならない。その戦争は、全人類にとって甚だしい災厄であり、勝者なき戦争であり、皆が皆敗者となる戦争である。確実にこうしたことが起きないようにするため、我々両国民は、平和が安全を生み出すことをお互いによく理解しなければならない」[Leuchtenburg 1990e]と言及した。そして民主主義革命については、アメリカが民主主義革命の手本となっていることを強調し、世界各国が自己決定権を持っていることを訴えた。こうした産業科学革命と民主主義革命について述べたのに引き続いて、「生活水準を向上させる競争」という興味深い概念をアイゼンハワーは導入している。

「率直に言うと、『二つの陣営』、『共産主義との戦い』、『平和のための戦い』といった言葉は、好戦的に聞こえるかもしれない。もし共産主義がソ連国民のために豊かでよりよい生活を築くことになるのであれば、我々はそれを称賛するだけだ。もし『平和のための戦い』に平和を望むすべての国民が真摯に参加するならば、我々はあなたがたと共に平和のために戦うだろう。しかし、こうした言葉が、力とその脅威、破壊活動、もしくは秘密活動により、望まない人々に共産主義を広めざるを得ないという意味であるならば、我々はそうした言葉を受け入れることはできない。我々は、人々の生活と労働条件を改善する競争を進んで行なうつもりだ。イデオロギーからはるか遠く離れていて、イデオロギーなど全く望んでいない人々にこれを広めようと競争するようなことは我々の目的ではない」[Leuchtenburg 1990e]

アイゼンハワーは、イデオロギーを広める競争から生活水準を向上させる競争への転換を提案しているわけだが、これは非常に巧みな提案だと言える。イデオロギーというのは教義的な絶対性をもつ傾向があるので、異なったイデオロギーが競争する場合、その競争も折り合いがつかなくなる可能性が高い。イデオロギーというものは一般的に純化という一種独特の性質を持つので、夾雑物となるような妥協をなかなか受容することはできないのである。それに比べて生活面における競争というのは、それ程対立の激化を生まない。それは生活水準の向上というのがイデオロギーのように絶対性を持ちえないからである。

演説の後半部でアイゼンハワーは、アメリカの世界政策に関する三原則を明らかにした。その三原則とは、「自分は自分、人は人」、「成長しあい」、「学びあい」の三原則である。まず「自分は自分、人は人」という第一の原則についてアイゼンハワーは以下のように述べている。

「アメリカ国民にとってよいシステムは、ソ連国民にはよいとは限らないし、逆もまた然りである。アメリカのシステムもソ連のシステムも他国にとっては正しいものだとは限らない。我々アメリカ人は、明日の世界を、たくさんの異なったシステムが共存を続けていくものだと見なしている。我が国では、『自分は自分、人は人』と言う。これは自由諸国の世界にとってうってつけのモットーだと思う。それぞれが、それぞれの最もよいと思うやり方で問題を解決する。『自分は自分、人は人』という言葉は、明日の世界の基礎をなす第一の原則だ」[Leuchtenburg 1990e]

この原則は、世界各国が自己決定権を持っていることを確認するものである。注目すべき点は、多様性を尊重し、ソ連のシステムだけでなくアメリカのシステムも他国にとって正しいものだとは限らないと認めている点である。

第二の原則の「成長しあい」は、世界共通の問題を解決するために、アメリカが発展途上国を支援するという立場を明らかにしたものである。そして第三の原則の『学びあい』については、文化が人類共通のものであることを強調し、その考えを基にした文化交流の必要性を訴えている。ではこうした三原則は実際にどのような意義を持つのか。アイゼンハワーはその意義について以下のように述べている。

「我々と世界の国々は、お互いに学びあい、考え方を自由に交換し、他者の成功から学び、失敗を教訓とし、お互いの新聞や本を読み、希望や恐怖を率直に話し合い、もし必要であれば議論しなければならない。もしそうした議論が、敵意、そして教条主義や派閥主義の精神によってではなく『自分は自分、人は人』、『成長しあい』、そして『学びあい』の三原則でなされるなら、傷付け合うことになるとは限らない。もし我々がこうした原則に合意し、た

めらうことなく心から自分達のものとして実行できたなら、我々はいったいどれだけのことをなしえるだろうか。第一に、軍縮に向けて継続的進歩をなすことで平和に多大なる貢献をすることができる。軍縮の結果として、我々は、武器製造や軍隊の維持に使われている分の国富を節約することができる。それにより、我々はより満ち足りた豊かな生活を営むことができる。軍縮の結果により生じた余剰の一部を、現代の二つの革命に関する諸問題を解決するために使うことができる。発展途上国が、我々皆の利益となるような形で発展するように援助することができる。国際紛争から解放され、恐ろしい破壊兵器の重荷の無い世界を最終目的として見通すことができる。我々は、世界のすべての人々が心から待望している平和をもたらすことができる。第二に、潜在的侵略者が敢えて平和を損なおうとはしない、安定した国際秩序を創り出すことができる。我々は戦争を禁じることができる。このため、我々は、一国の政府ではなく平和を望むすべての人々の福利に貢献する国際平和軍を必要としているはずだ。第三に、我々は、国際紛争が国際法に基づいて平和的に解決されると保証することができる」 [Leuchtenburg 1990e]

ここでは三つの目標、すなわち軍縮、安定した国際秩序の構築、国際紛争の平和的解決が三原則と関連付けられて語られている。そして三つの目標を達成するために、まず初めに相互理解し、それから対話へ進み、信頼を築き、協調していくことができるという一連のプロセスが必要であることが提示されている。但し、協調していくにあたって、望まない者に自分の考え方を押し付けけないという条件が付け加えられている。このように軍縮により生じた余剰を生活向上に利用するという第一の目標は、政権発足当初の「平和の好機」演説でも見られたものである。アイゼンハワーは、リンカーン (Abraham Lincoln) の演説の一節を引用し、次のように語って長い演説を締め括った。

「我々アメリカ人は、アブラハム・リンカーンの『すべての国々との公正で永続する平和を達成し、育むために全力を尽くそうではないか』という言葉に従ってこうした努力を行なおうと思う。あなたがたと我々は、戦争中、肩と肩を並べて戦った。今度は、平和を成就するため、建設的に仲良く協調していくことができないはずはない。友よ、静聴を感謝します。おやすみなさい」 [Leuchtenburg 1990e]

このリンカーンの言葉は、1865年3月4日に行われた第二次就任演説の「誰にも悪意を抱かずに全人に慈愛を。神が我々に正義を目にするように与えたもうた正義を固く信じ、我々が今取り掛かっている務め、すなわち、国家の亀裂を継ぎ合わせ、戦いを潜り抜けてきた者、寡婦、孤児に救いの手を差し伸べ、我々の間に、そしてすべての国々との間に公正で永続する平和を達成し、育むために全力を尽くそうではないか」 [Oates 1978: 445] という最も有名な一節からの引用である。これは、南北戦争によって損なわれた合衆国の

統一性を繕うフェンス・メンディングを目的とした演説であり、人間を奴隷にすることは神の摂理に反することを説き、「同じ聖書を読み、同じ神に祈る者」が二つに分かれて戦う愚かさを論じている。なお、朝鮮停戦協定締結を国民に報せる 1953 年 7 月 26 日のテレビ演説でも、同じ一節から冒頭の「誰にも悪意を抱かずに全人に慈愛を」という言葉が引用されている [Ambrose 1984: 106]。

5. 結語

これまで見てきたレニングラード、キエフ、モスクワでの各演説は、それぞれ独立したものではなく、実は三つの演説で一組のものであった。レニングラードでの演説の目的は、自由のために平和を維持することに貢献する国家としての「アメリカ像」を提示し、現代のアメリカを十九世紀中葉のマルクス理論の用語で説明しようとしているソ連のプロパガンダが誤っていることを示すことであり、アメリカのシステムこそが平和への道であることを示すことであった。そしてキエフでの演説の目的は、米ソ両国を隔てている問題を浮き彫りにし、そうした問題における齟齬をなくす前に、ソ連の態度と政策を変えなければならないということを示すことであった。さらに最後のモスクワでの演説の目的は、平和共存という選択肢を提示し、米ソ関係をさらに実りある形に前進させることであった [Leuchtenburg 1990f]。

こうした一連の目的から浮かび上がってくるのは、初めにレニングラードでアメリカが求めているものはただ平和であることをソ連国民に印象付け、次にキエフでソ連が態度を変えることが必要であることを示唆し、最後にモスクワで平和共存という選択肢を提示するという十分に練られた三段構えのレトリック構想である。こうした巧妙な構想に基づいた演説がソ連国民に与える影響は、多大なものになったはずである。そのことからすると、フルシチョフが、アイゼンハワーの訪ソをキャンセルするために U-2 事件を利用したという政権内の一部の分析もあながち見当外れではないと言える。

本稿で扱った演説は、冷戦を促進する方向に作用するものではなく、冷戦を抑制する方向に作用するものである。ここで、はたしてそれは冷戦レトリックの範疇に含まれるのであろうかという質問が生じてこよう。それに対しては、冷戦が過熱し、東西間で本当の戦争が起きないように抑制するレトリックも、冷戦体制を維持するうえで必要不可欠なものであった、つまり、冷戦を抑制するレトリックも冷戦維持のためのレトリックの一部を構成するものだったと答えるに如くはない。

最後にこの日の目を見ることのなかった演説が現代アメリカにとっていかなる意義があるものか一言述べておきたい。アイゼンハワーがモスクワでの演説で示した「自分は自分、人は人」、「成長しあい」、「学びあい」という世界政策に関する三原則は、冷戦構造崩壊後、唯一の超大国となり敵対する勢力を完全なる悪とみなすようになったアメリカが再検討すべき方針ではない

だろうか。

注

- (1) 冷戦レトリックは、「危機レトリック」の範疇に属する。その性質は、ソ連や共産主義に「悪」や「脅威」といった位置付けを与えることによって、アメリカ本土に対する直接的な攻撃がなくても「危機」の存在を示すというところに見出される [Kuypers 1997: 8-9]。Jim A. Kuypers, *Presidential Crisis Rhetoric and the Press in the Post-Cold War World* (Westport, Conn., Praeger, 1997) 8-9.
- (2) U-2 事件については、弊論「アイゼンハワー大統領のレトリック—U-2 事件を事例として—」（『南山考人』第 33 号所収）を参照されたし。

文献

- Ambrose, Stephen E. [1984] *Eisenhower: the President v.2.* New York: George Allen & Unwin.
- Eisenhower Library [1960] 'Discussion at the 445th Meeting of the National Security Council, May 24, 1960' in *Whitman File, NSC Series, Box 12.*
- Federal Register (ed.) [1961] *Public Papers of the United States: Harry S. Truman 1945* Washington: Government Printing Office.
- General Services Administration, National Archives and Records Service, Office of the Kesaris, Paul and Joan Gibson (eds.) [1980] 'Soviet Manpower 1960-70, May 1960' in *Minutes and Documents of the Cabinet Meetings of President Eisenhower, 1953-1961.*
- Leuchtenburg, William (ed.) [1986a] 'Minutes of Cabinet Meeting, May 26, 1960 2:30 p.m.-3:50 p.m' in *The Diaries of Dwight D. Eisenhower 1953-1961, Box 50.*
- [1986b] 'Letter from Ruth Ann Couto to Dwight D. Eisenhower, March 27, 1960' in *The Diaries of Dwight D. Eisenhower 1953-1961, Box 49.*
- [1986c] 'Letter from Dwight D. Eisenhower to Ruth Ann Couto, April 13, 1960' in *The Diaries of Dwight D. Eisenhower 1953-1961, Box 49.*
- [1990a] 'Speeches, Statements, and Toasts for the President's Visit to the Soviet Union' in *President Dwight D. Eisenhower's Office Files, 1953-1961 Part 2: International, USSR Far East Trip-Invitation Withdrawn 1960.*
- [1989] 'From U.S. Military Mission, Moscow, Russia to War Department (N24674), June 13, 1945' in *President Harry S. Truman's Office Files, 1945-1953 Part 3: Subject File, Foreign Affairs Russia 1945-1948.*
- [1990b] 'Itinerary for the President's Visit to U.S.S.R., May 7, 1960' in *President Dwight D. Eisenhower's Office Files, 1953-1961 Part 2: International, USSR Far East Trip-Invitation Withdrawn 1960.*
- [1990c] 'Draft for Leningrad, May 12, 1960' in *President Dwight D. Eisenhower's Office Files, 1953-1961 Part 2: International, USSR Far East Trip-Invitation*

Withdrawn 1960.

- [1990d] ‘President’s Speech-Kiev, June 14, Draft, April 19’ in *Dwight D. Eisenhower Office Files, USSR Far East Trip-Invitation Withdrawn 1960.*
 - [1990e] ‘Moscow Speech, Draft, April 19’ in *Dwight D. Eisenhower Office Files, USSR Far East Trip-Invitation Withdrawn 1960.*
 - [1990f] ‘Memorandum for the President, April 19, 1960’ in *Dwight D. Eisenhower Office Files, USSR Far East Trip-Invitation Withdrawn 1960.*
- リンク、アーサー [1974] 『ウッドロウ・ウィルソン伝』、草間秀三郎訳、東京：南窓社。(1963
Woodrow Wilson: a brief biography. Cleveland: World Pub. Co.)
- Oates, Stephen B. [1978] *With malice toward none: The Life of Abraham Lincoln.* New York: New American Library.